

バレエを踊る人魚姫 「爪先立ち」があらわす異界

2016年7月2日

発表者：中丸禎子（東京理科大学/nakamart@rs.tus.ac.jp）

発表内容

1. 概要確認と問題提起
2. 『人魚姫』とバレエの関係
 - (1) 「空気の娘たち」と『ラ・シルフィード』
 - (2) 人魚姫の踊り
3. ポワント
 - (1) バレエの歴史
 - (2) 足／脚の文化史
4. 『人魚姫』における異界との交流

1. 概要確認と問題提起

(1) 『人魚姫』 概要

原題：Den lille Havfrue. 1837

著者：ハンス・クリスチャン・アンデルセン (Hans Christian Andersen, 1805-75/デンマーク)

- ※ 海の王の6人の娘の末娘「人魚姫」は、祖母に聞いた海の上の世界にあこがれていた
- ※ 15歳の誕生日の夜、海上に浮かび、船上で16歳の誕生日を祝う人間の王子を目にする。嵐が来て海に投げ出された王子を人魚姫は浜辺に運ぶ。
- ※ 浜辺に倒れていた王子を通りかかった娘が発見し、助けを呼ぶ。王子は娘が命の恩人だと思う。王子のことが忘れられない人魚姫は、祖母に人間のことを尋ねる。祖母によると、
 - 人魚は300年生きられるが、魂がなく、死ぬと泡になる
 - 人間は50年しか生きられないが、死後は魂が空に昇る
 - 人魚と人間が結婚すると、人間は自分の魂を保ったまま、人魚に魂を分け与えることができる
 - 人間は人魚の尾を醜いと思うため、結婚の可能性はない
- ※ 人魚姫は、海の魔女のところに行き、尾を足にかえる薬をもらう。その代償は、
 - 海の中で最も美しい声を魔女にやる（話せなくなる）
 - 歩くたびにナイフを踏むような痛みが走る
 - 一度人間になると人魚には戻れない
 - 王子がほかの娘と結婚すれば、海の泡になって消える
- ※ 王子は人魚姫を気に入り、そばに置く。人魚姫は、
 - 男装して馬に乗る
 - 高い山に登る
- ※ 王子は隣国の王女を訪問する
 - 結婚の可否は王子の判断にゆだねられる
 - 当初は、「人魚姫ほど自分を助けた娘に似ている人はいない」という理由で断る予定だったが、王女が娘本人であったため結婚を即断する
- ※ 人魚姫の姉たちは人魚姫を死なせないため、自分たちの髪の毛と引き換えに魔女からナイフを受け取る
 - 人魚姫がナイフで王子の心臓を刺し、血が足にかかれば人魚に戻れる
- ※ 人魚姫はナイフを手に王子と隣国の王女の寝室に向かう
 - 王子は夢の中で花嫁の名を呼ぶ
 - 人魚姫はナイフを捨て、海に身を投げる
 - 自分の体が泡になるのを感じる
- ※ 太陽が昇ると、人魚姫は泡から抜け出し空中にあがる
 - まわりには自分と同じように人間の目に見えず、音楽のような声も人間に聞こえない者たちがいた
 - それは「空気の娘たち」だった
 - 「空気の娘たち」は、人魚と同じく魂を持たないが、300年間人間のために働くと魂を得られる。

(2) 問題提起

「空気の娘たち」とは何か？

2. 人魚姫とバレエの関係

(1) 「空気の娘たち」と『ラ・シルフィード』

- ※ 『人魚姫』に影響を与えた作品
 - フケー『ウンディーネ』(1811 / 独)
 - デンマーク民謡『アウネーテと人魚』(1300頃 / 丁)
 - ◇ バッグセン『ホルメゴーのアウネーテ』(1808 / 丁)
 - ◇ エーレンスレーヤ『アウネーテ』(1812 / 丁)
 - ◇ アンデルセン『アウネーテと人魚』(1834)
 - イングマン『人魚 ロマンズ』『解放された人魚』(1812 / 丁)
- ⇒いずれの作品にも、「空気の娘たち」は登場しない
- ※ バレエ『ラ・シルフィード』(La Sylphide, 1832 / 仏)
 - 空気の精「シルフ」の仏語女性形＝「空気の精」
 - デンマーク初演：1836年〔『人魚姫』刊行：1837年〕
 - ロマンティック・バレエの代表作
 - 爪先立ち(ポワント)を初めて本格的にバレエに導入人魚姫の踊り

(2) 人魚姫の踊り

- ※ 人魚姫が踊る場面は2か所
 - 人間になった直後、王子の前で踊る☛【引用1】
 - 王子の結婚祝いのパーティで踊る☛【引用3】
- ※ バレエとの共通点
 - 爪先で立つ☛【引用1】⇒ポワント
 - 漂うような動き☛【引用1】
 - 今までに誰も見たことがない☛【引用2】⇒新しく始まったロマンティック・バレエ
 - 回転☛【引用3】⇒ポワントによって可能に
 - 足が痛い☛【引用1】【引用2】【引用3】
- ※ 「人魚姫が踊るのがバレエ」とすると、そこから何が言えるか？

3. ポワント

(1) バレエの歴史

- ※ 宮廷バレエ
 - 起源はルネサンス期イタリア(5つの足のポジション)
 - フランス宮廷主催の催し
 - ◇ カトリーヌ・ド・メディシス(アンリ2世妃、イタリアのメディチ家出身)主催⇒「バレエ」という名称の採用
 - ◇ ルイ13世、ルイ14世は幼少期からバレエを学び、自ら踊る
 - ⇒王権強化・維持のためのプロパガンダ
 - ⇒諸国の王族貴族による国際的な社交の場(異国情緒)
 - ⇒神話モチーフ
 - ◇ ルイ14世、王立舞踏アカデミー(1661)、国立高等舞踏学校(1713、のちのオペラ座)設立
- 1670年、ルイ14世が踊り引退⇒踊り手は王族貴族からプロのダンサーに
 - ◇ ダンス・ホールからステージへ
 - ◇ ステージが大きくなる⇒横方向の動き、脚のターンアウト
 - ◇ 客席より高いステージ⇒上方向のステップ
 - ◇ 1681年、プロの女性ダンサー登場⇒裾の短いスカート、ステップ

- ヨーロッパ各国に王立・帝室劇場
 - ◇ 1748年：デンマーク・コペンハーゲン：王立劇場
 - ◇ 1773年：スウェーデン・ストックホルム：王立劇場
 - ◇ 1757年：ロシア・ペテルブルグ：ポリショイ劇場
 - ◇ 1776年：ロシア・モスクワ：ポリショイ劇場の前身
 - ◇ 1776年：イタリア・ミラノ：スカラ座
- ※ プレ・ロマンティック・バレエ
 - フランス革命後に登場
 - 1815年ごろ：ポワントの技術（ただし、「一発芸」として）
 - 宮廷バレエとの共通点：異国情緒
 - 宮廷バレエとの相違点：身分違いの恋⇒妖精など異界の者は登場しない
- ※ ロマンティック・バレエ
 - ロマンティック・チュチュ：踝丈のスカート
 - ポワント
 - ◇ 技術：回転
 - ◇ 表現：空中を漂う妖精・霊：異界の者との交流を描けるようになる⇒異類婚姻譚
 - 『ラ・シルフィード』（1832）：舞台はスコットランド。結婚が決まった若者ジェイムズが空気の精シルフィードに心を奪われる。飛び回るシルフィードをとどめるため、ジェイムズは魔女マジから譲り受けた布をシルフィードにかける。シルフィードは羽がとれて死に、ジェイムズも命を落とす
 - 『ジゼル』（1841）：踊りが好きな村娘ジゼルは貴族の身分を隠すアルブレヒトと愛し合っていたが、アルブレヒトの正体を知り、ショックで命を落とす。結婚前に死んだ乙女は精霊ウィリーとなる。ウィリーとなったジゼルは、アルブレヒトと再会するが、朝になると消えてしまう
 - デンマーク王立バレエ団とオーギュスト・ブルノンヴィル
 - ◇ オーギュスト・ブルノンヴィル（1805-79）〔比較：アンデルセン（1805-75）〕
 - ◇ 「デンマーク・バレエの父」
 - ◇ 父アントワーヌ・ブルノンヴィル（フランス）：パリ・オペラ座⇒スウェーデン王立バレエ団⇒デンマーク王立バレエ団
 - ◇ 1820年代：フランスのバレエ界（タリオーニと同時期）
 - ◇ 1830年：デンマーク王立バレエ団芸術監督（～77年）⇒50編以上のバレエを振り付け、うち10編は現在も上演
 - ◇ ブルノンヴィル版『ラ・シルフィード』（1836）：タリオーニ版を参考に、オリジナルの音楽（ラヴェンショルド）で振付。主演はルシル・グラーン。ロマンティック・バレエが今に伝わるのは、デンマーク王立バレエ団によるブルノンヴィル版の継承によるところが大きい。
- ※ クラシック・バレエ
 - ロシアを中心に発展
 - 演劇の要素が薄れ、難しい技巧を用いる
 - クラシック・チュチュ（華麗な足さばき）
 - 『白鳥の湖』（1877年）：王子ジークフリートは、各国出身の花嫁候補（⇒異国情緒）から妃を選ぶことになる。憂鬱になり森に行った王子は、呪いで白鳥にされたオデットを愛するが、妃選びの席で誤って悪魔の娘オディールに愛を誓う。オデットと王子は湖に身投げする⇒異類婚姻譚
 - 『眠れる森の美女』（1890年）
 - 『くるみ割り人形』（1892年）
- ※ モダン・バレエ
 - クラシック・バレエにないステップ、民族舞踊
 - イサドラ・ダンカン
 - バレエ・リュス

(2) 足／脚の文化史

※ ポワントの意義（イズリーヌ『ダンスは国家と踊る』）

- 女性のイメージの刷新：上昇、純粹、軽やかさ、手が届かない存在、具現化された魂、恩寵
 - ◇ 比較：それまでの女性のイメージ：不純、動物的
 - 最初の女性イヴ（蛇に誘惑されて禁断の実を食べ、アダム／男性を誘惑して墮落させた）
- ポワントをする女性⇒イヴからマリアへ
 - ◇ ウィリー、亡霊、聖母⇒処女にして母、処女あるいは母
 - ◇ 各動作の修得⇒ダンスに身をゆだねるのではなく、動きの抑制を可視化

＜ポワントによる魂の具現化＞

「魂が肉体から離れる」、つまり、まだ女の性が不純で動物的なものであるという疑いのあった頃の女性的性質、あるいは「下層の」本能に結び付いたある種の肉体的性を放棄するという条件で、女性は具現化された魂となる。このダンスと女性ダンサーのイメージはきわめてプラトンの的でありデカルト的である。

※ ヨーロッパにおける足／脚のイメージ

- 足／脚＝生殖器の暗喩
 - ◇ 足を見せること⇒タブー
- 真っ直ぐな、制御できる足＝正しさの象徴
 - ◇ 脚部障碍⇒性道德の逸脱
 - サテュロス／悪魔：山羊の足
 - 魔女：腰が曲がり、杖をついている
 - バッコスの巫女：葡萄酒に酔い、狂乱⇒まっすぐ歩けない
 - アンデルセン『赤い靴』：勝手に踊る足⇒主人公の虚栄心
 - ◇ 足の「正常」化：人間社会への順応
 - 映画『ライムライト』（1952）：バレリーナのテリーは、自分のレッスン代を払うため姉が娼婦をしていたことを知り、脚が麻痺⇒治癒＝社会復帰
- 脚部障碍者としての人魚：足がない⇒男性を誘惑して殺す
 - ◇ 人魚姫：自ら尾を捨て、ポワントによって足を制御⇒欲望のコントロール

※ 女性イメージの変化≠女性の地位の上昇

- ヴィクトリア朝時代（1830年代後半～1900年頃）ヨーロッパ全体で性に関する抑圧の強化
 - ◇ 「足／脚」のタブー性の強化⇔バレエ：女性の脚を見られる唯一の機会
- 1831年、パリ・オペラ座の民営化⇒採算の取れる経営が求められるようになる
 - ◇ ブルジョワ男性が愛人を見つける場所⇒客席ではなくフォワイエ・ド・ラ・ダンスで鑑賞
 - ◇ バレリーナ＝下層階級の女性にとって、パトロンを見つけ、ステップアップするための手段
- 人魚姫のバレエ：女奴隷として踊り、王子というパトロンを得る●【引用1】
⇒人魚姫は、踊り方・目的ともに当時のバレリーナと重なる

4. 『人魚姫』における異界との交流

※ 「空気の娘たち」／バレエモチーフの意義

- 異類婚姻譚を共通点に、人魚表象と妖精表象が結合
 - ◇ 『人魚姫』の特徴1：本能に逆らって殺すべき人間を愛する
 - これまでの人魚：本能に従って人間を誘惑し破滅させる
 - 『人魚姫』の特徴2：人魚の視点から書く
 - ◇ これまでの人魚文学・妖精物語：人間の視点から異界から人間世界に来た人魚や妖精を書く
 - ◇ 人魚姫：幼いころから人間世界（異界）にあこがれる
 - 太陽●【引用4】：太陽王（ルイ14世）
 - 輝く星たち●【引用5】：エトワール
- ⇒「上昇」志向／天空へのあこがれとバレエ／国家のシステムの結びつき

引用集

【引用 1】

さて、女奴隷たちは優美な漂うような踊りをとて素晴らしい音楽に合わせて踊り、そこで、人魚姫は美しく白い腕を上げ、つま先立ちになり (reiste sig paa Taaspidsen)、そして床の上を漂い、これまで誰も踊ったことのない踊りを踊りました；動くたびに、彼女の美しさはますます明白になり、そして彼女の眼は、女奴隷たちの歌よりも、心臓の深いところへ語りかけました。

みなはそれに恍惚とし、中でも彼女を小さな拾い子さんと呼んだ王子は格別で、そして彼女はますます踊りましたが、彼女の足が大地に触れるごとに、まるで鋭いナイフを踏むようでした。王子は言いました、いつもぼくのそばにいなさい、そしてぼくの部屋の外のピロードのクッションで寝る許可をあげよう。(s. 101)

【引用 2】

王子のお城で、夜に他の人たちが寝静まると、彼女は広い大理石の階段を下りて外に出ていき、そして燃えるような両足を冷やすために冷たい海水の中に立ち、その時には深みの中、下にいる人たちに思いをはせました。(s. 101-102)

【引用 3】

あたりが暗くなり、色とりどりのランプがともって、船乗りたちはデッキの上で楽しいダンスを踊りました。人魚姫は海の上に浮かびあがって同じ華やかさと歓びを見た最初の時を思わずにはいられず、踊りの中ですくすく回り、追い立てられるツバメのように漂い、皆は拍手喝采をあげました、あの子がこんなにすばらしく踊ったことは一度もなかったよ。華奢な両足はナイフの刃を踏むように切り裂かれていましたが、彼女はそれを感じませんでした。もっと強い痛みで切り裂かれていたのは、心臓でした。彼女は知っていました、王子を見られる夜はこれが最後、彼のために彼女は同族も家も捨て、美しい声をあげてしまって、来る日も来る日も終わることのない痛みを苦しみ、王子はそのようなことは考えさえもしないのです。王子と同じ空気 (Luft) を吸うのも、深い海を見るのも、星たちが輝く青い天を見るのもこの夜が最後、考えも夢もない永遠の夜が、魂を持たない、魂を勝ち取ることでできなかった彼女に待っていました。そしてすべての喜びと楽しみは船上で夜を徹して続き、彼女は微笑み、踊りました、心臓の中に死の思考をたたえて。(s. 104)

【引用 4】

凧のときには太陽を見ることができ、それは真紅の花に見え、白いがくからいっばいの光を放っていました。小さな姫たちはそれぞれ、海の中に自分の小さな花壇を持っており、そこは自分自身が望むとおりに掘ったり植えたりすることができるのでした；一人は花壇にクジラの形を与え、もう一人には、自分の花壇を小さな人魚そっくりにする方が良いように思え、けれども末の姫は彼女の花壇を太陽そっくりに真ん丸にして、ただ花だけを植えました、太陽のように赤く輝く花だけを。(s. 88)

【引用 5】

わたしたちとは反対に、人間は魂を持っていて、それは肉体が土になった後で永遠に生きるのです；魂は澄んだ空気を通して上がっていくのです、輝く星たちみなのところまで！(s. 96)

※翻訳はすべて中丸による

参考文献

『人魚姫』原作・関連論文

- ◆ Hans Christian Andersen: Den lille Havfrue. In: Eventyr Bd. 1. København (Det Danske Sprog- og Litteraturselskab) 1963, S. 87-106
- ◆ ハンス・クリスチャン・アンデルセン「人魚姫」、『完訳 アンデルセン童話集(一)』所収、大畑末吉訳、1984年、110-156頁
- ◆ 中丸禎子「人魚姫のメタモルフォーゼ」、石井正己編『子守唄と民話』所収、明石書店、2013年、pp.149-164
- ◆ 中丸禎子「人魚姫が浮かび上がる時 アンデルセン『人魚姫』における主体的な女性とデンマークの人魚モチーフ文学における原型」、『ドイツ文学』148号(日本独文学会)、2014年、pp.129-139

バレエの歴史

- ◆ イズリーヌ、アニエス『ダンスは国家と踊る フランス コンテンポラリー・ダンスの系譜』岩下綾・松澤慶信訳、慶応義塾大学出版会、2010
- ◆ 佐々木涼子『バレエの歴史 フランス・バレエ史——宮廷バレエから20世紀まで』学研、2008
- ◆ 新星出版社編集部編『SPORTSシューズのひみつ』新星出版社、2009
- ◆ 鈴木晶『バレエ誕生』新書館、2002
- ◆ 鈴木晶編『バレエとダンスの歴史 欧米劇場舞踏史』平凡社、2012
- ◆ 芳賀直子『ビジュアル版 バレエ・ヒストリー バレエ誕生からバレエ・リュスまで』世界文化社、2014
- ◆ バリンジャー、ジャンス、サラ・シュレジンガー『ポイントのすべて トウシューズ、トレーニング、テクニク』佐野奈緒子訳、大修館書店、2015

デンマークのバレエ

- ◆ 毛利三弥・立木燐子『北欧の舞台芸術』三元社、2011
- ◆ デンマーク王立劇場ウェブサイト(英語・デンマーク語) <https://kgltteater.dk/> (2016年6月20日閲覧)